

【応仁】

武士モノを著わす拙者にとって【天正】 【承久】につづき、もう一つ気になる元号がある。

【応仁】（キリスト紀元1467～1468）。

「応仁の乱」で誰もが知る元号。たった二年だが、日本史のターニング・ポイントであったことは云うに及ばず、刀剣史のターニング・ポイントでもあった。

平安末期から現れた日本刀、太刀にかわって、いまの世の吾らが日本刀と呼ぶ打刀が出現したのは永享（キリスト紀元1429）以後。その姿を完成したのが応仁。

太刀は「抜く」「斬る」の二手間を要するが、打刀（刀）は抜くと斬るが一手間で済む。

「ヤァヤァ、我こそは……」の合戦でなくなり、奇襲、速攻さが必要になる戦さ場になったからだ。ココんところを語ると日が暮れるので省く。

鎌倉幕府が倒れ、足利尊氏が征夷大將軍になったころは、太刀から刀に変わる過度期。剣は乱世を予想したのだろう。

はじめの刀は刀身二尺三、四寸が多かった。文亀から天文になると、さらに短く二尺前後になる。

地侍、土豪が奇襲に備えるためか、農作業の折も腰に差しておけたからであろう。見てきたわけでないので刀剣研究家諸氏も、そう想像するしかない。

ただ、はっきり云えることは、武士が大量生産される時代になった。某土豪が一国一城の主になれる時代を迎えていた。

銘は太刀も刀も銘は、「佩いて」「差した」とき外側になる中心 {なかご} の面に切る。手にし構えたとき太刀は右、刀は左。ゆえに太刀と刀は銘の位置は反対。過度期であったゆえ一人の刀工でも太刀銘 刀銘の両方がある

拙者が所持する室町時代のはじめか中ごろつくられたであろう脇差。銘の刀工は秘す。

拵えは江戸期であろう。目貫は亀。櫃 {ひつ} はあるが筭はない。

小切先。庵棟。鎬が高く元重、先重も厚い。ガッチリとした感じだが手持ちも良い。

研ぎに出し、切腹用にしようかと（呵々）。

話を戻す。刀剣史のターニング・ポイントでもあったと同時に剣術のターニング・ポイントでもあった。

鹿島新当流、柳生新陰流など剣術諸流が生まれたのも打刀の出現があったからだ。そして、はっきり云えることは、両手で持つ、構えることで＜あたらしい武士＞が出現した。

青竜刀もフェンシングも片手で操る。バイキングもスパルタカスも同じであったろう。片手で操れば、剣は手の先の道具でしかなくなる。武士は両手で持ち、間合が狭まる恐怖に打ち勝たった。ゆえに剣と身が一体となり、技が冴える。＜あたらしい武士＞の道が拓けた。